

# 待ち続ける影

神風零

この国には徴兵制度がある。相応の理由がない限り、この国の民は、一度は必ず兵隊稼業を経験した。

任期は3年間である。この3年間の内に何事も起こらなければ、平時の兵隊生活を送って終わるだけである。毎日規則正しい生活を送り、時折演習に参加する。体を鍛えることだけに明け暮れる。理不尽な制裁も、慣れれば耐え切れないほどのものではない。

この世はいつでも苦痛に満ち溢れていて、むしろ3年間という期限の中で、歯を食いしばれば終わることがはっきりと分かっているから何のことはない。携帯電話もパソコンも、甘い恋を歌う華やかな音楽もドラマも、そして自分を甘く包んでくれる両親からも、たった3年間離れるだけであった。

二人の青年がいた。

一人は名を倉石といった。大学受験に失敗し、徴集から逃れられずこの春から兵隊稼業に従事する。

もう一人は武藤といった。倉石の友人で、彼は無事大学へ合格した。大学生であれば、その間徴兵は免除されるのである。

「無事にこの任期を終えたら、同じ大学に入るんだ」

これが倉石の口癖となった。武藤もまるで合言葉のように返答する。

「そうさ。今までだって戦争はなかったんだし、俺らの時だってありはしないよ」

この国はいつでも平和そのものであった。

もう遠い昔に、教科書の中だけの世界に戦争があっただけであった。平和でない状態が戦争であるから、平和な彼らに魔の手は忍び寄らないものと決めていたのである。

しかし、戦争はやってきた。海を越え押し寄せて再び彼らの頭上にそれは舞い降りたのであった。

任期が始まったばかりの者は泣き叫び、満期を眼前にしていた者は現実を信じられず脱走を試みたが、誰一人逃げ出せる者はいない。元々若者の少ない国である。今は一人たりとも欠けることが許されなかった。引っ張られずに済んだ者は心密かに安堵し、声高に反戦を或いは参戦を叫んだ。

武藤は朝焼けの町を、息を切らして駆け抜け駅にたどり着いた。サラリーマンがぼつりぼつりというはずの駅は今や、戦争反対派とそれでも行かねばならぬ者たちとでひしめき合い、時折投石が起こっている。だが、それも冷静になってみれば非常に整然としており、仕組まれたものであるかのように武藤には見えた。

この日、倉石が出征するのである。彼を戦場に送る列車を見送りに、武藤は駅まで来たのだが、軍が全てを近寄らせず、結局会えずじまいであった。

次々と出ていく車両を歯噛みしながら武藤は見送る。人が小さな点となって蠢き、ひしめいて、その中に倉石がいるはずであった。

武藤は彼に最後に面会した時のことを思い出していた。

戦争が始まり、この国からも兵隊を出すことに決まった時である。

面会室で会った倉石の顔は青ざめていた。僅かに手が震えている。武藤にはかける言葉が見つからない。ただ世の中の理不尽さに恐怖し、そして倉石と自分との間にある大きくて深い、底の見えぬ断裂に僅かな優越感と安堵を抱いていた。

長い沈黙の後、倉石は青ざめる唇で呟いた。

「あの時、あと少し勉強をしていれば、俺もお前の側にいたのに」

やがて、戦争は終わった。ほんの僅かな小競り合いが散発する戦争であり、長引くかと論争されていたが、たったの数年間の出来事として幕引きがされたのである。

一瞬の火花のごとくであった。

——国家には。歴史には。

しかし、兵にとっては短くはない。国にも非常な痛みを伴った。人口と、労働力の少ない国である。そして、兵士を戦場に長く留め置くことは、その精神のためにも不可能であった。結局現役兵だけでローテーションを組むことができず、一度退役した者まで引っ張り出す有様で、免除もなくなり現役学生もその対象となった。

武藤は、最後の戦闘だけに参加した。大学を出る頃には終わっているであろうと思っていた戦争は終わらず、卒業を間近に控えた時期に僅かな訓練を施され、戦地に行ったのである。だが、最後まで前線に出ることはないままであった。志願兵らが奮戦し、行かずに済んだのは後から漏れ聞いたところである。

とにかくにも戦争は終わった。

他人の戦争であった。そして、長いこと忘れていた戦争であった。

帰還して、光輝くネオンと溢れる音楽に安堵したものつかの間、武藤を悩ませたものがある。  
「人を殺しましたか」

「殺されそうになることはありましたか」

帰還した兵士らに浴びせられる、マスコミと国民の好奇の言葉であった。

武藤はろくに銃も使わないまま終戦を迎え、帰国と同時に無事卒業と就職を果たしていたが、それでもある種の匂いが染みついているらしい。職場でも街を歩いていても、不意に、そして誰かれ構わずこの言葉を向けられた。その度に、彼は肩をすくめて申し訳なさそうにする。

「私は後方で待機していただけなので」

同じ事を聞かれては、同じ返答を繰り返す日々である。その答えを聞いた相手は、ほとんどが少しばかり残念そうであった。

ない目に遭わずによかったと笑う目が、期待を裏切られたかのような色を浮かべているのを、武藤は苛立ちと悲しみを緋い交ぜにした心持で眺めているしかない。

その感情の出所を、武藤は知っている。自分もかつてその場所にいたのだ。だからこそなおのこと、何も言わずどんな感情も込めず、ただ小さく生きていくだけであった。

同じく、首をすくめる男がいる。

武藤はある日、所要で駐屯地へ出かけた。戦闘に参加せずとも、戦地に行ったという証明が必要になったのである。

その駐屯地に、あの男がいた。

武藤が出征する際に集められた駐屯地は、都心からそれほど離れてはいない。軽い気持ちで彼は証明書を取りにその地に訪れたのだが、すっかりその場所に変貌してしまっていた。

教科書や資料で見たような、軍隊がそこにはあった。訓練の声や音が青空に木霊し、空気を震わせている。周囲にあった住宅地はどういうわけかどこまでも空き地が広がっており、武藤は足を止めてその光景を眺めている。自分がいない間に何が起きたのか、武藤には理解ができなかった。帰還してから今までと、戦地に行くまでの生活は彼にとっては何らの変哲もない生活であったから、まるでタイプスリップをしてしまったかのような風景に、息をするのも忘れている。

その時、泳ぐ視線がその男を見つけた。

営門の前の広い通りは、大きな街路樹で覆われている。枝を広げて空を遮り、湿り気を含んだ風が道路を撫でているが、陰鬱ではない。駐屯地にいる兵士らの声とその物憂さを全て払拭しているのだ。

その街路樹の下に男はいた。薄汚いオリーブグリーンの作業着を着ているが、生粋の軍人ではないようで、中には入らずただ、放心した虚ろな目で駐屯地を眺めている。

背中を丸めた彼は、時折激しく響き渡る銃声音に覚醒を促されるかのようにして目を見開き、やがて愛おしそうに目を細めて、聞こえてくる訓練の掛け声や、空砲の音に耳を傾けているようであった。

それもまたしばらくすると鬱蒼とした木々の落す影に彩られ、生気を奪われて世界を見つめるのである。

「倉石……」

武藤は確信した。

最後に彼に会った時の、影を纏い青ざめる顔と重なるものを武藤は見た。

「倉石！」

武藤が駆け寄ると、男も気が付き視線を動かす。

やはりそれは倉石であった。

「ああ、武藤じゃないか」

立ち上がりもせず、倉石は薄く笑った。あまりに儚い笑みに、武藤は言葉を飲みこむ。

「何だ、お前も戦地に行ったのか？」

倉石には武藤の動揺が伝わらなかったようでもあり、黙殺されたかのようにもあった。彼の口調はすっかり軍の人であり、力強く響き渡って武藤を圧倒した。

武藤は倉石の変わりように、心を刺されつつも、

「ああ、行ったけど、俺は」

だが、その後の言葉は続かなかった。

倉石の目が研ぎ澄まされた鋭利な刃物のように武藤を見ている。その目と曖昧を許さない声の響きに、戦地に行っても戦争をしていない、とはどうしても言い出せなかった。

そのことが、罪であるかのように武藤をどこかで苛んでいる。責める事象でもなく、むしろ喜ぶべきことであるのに、武藤の後ろめたさははっきりと姿を現したのであった。

まるで銃口を突きつけられているかのような。体が硬直し動けないでいる友を前にして倉石は、彼の無意味で不必要な緊迫の束縛に気が付かないのか、ただ触れないのか、その心の機微も読み取らせずに憂鬱を纏い覆い隠している。

無言が流れ、影が彼らの間に敷き詰められた。

その間も、駐屯地からは荒々しい声と砲声が轟いてくる。それを倉石は、まるで、優雅なクラシックを聞くかのようにしているのだ。

「今、何をしているんだ？」

沈黙を切り裂き、倉石が言った。武藤ははたと目を上げた。

「ああ……今は働いている」

「へえ。会社勤め？」

楽しげな声に、やっと武藤は息をつく。

「まあな」

「大学は出られたのか」

「うん」

武藤は倉石の横に腰を下ろした。ひやりと伝わる地面の冷たさに、僅かに腰を浮かせたが、何故か倉石の前で眉根を寄せることすら許されないようで、武藤はその冷気を受け入れる。

「お前は？」

やっと武藤は聞きたかったことを倉石に向けた。目を合わせず、目の前を行き交う軍用車両に目を泳がせながら、

「お前は何をしているんだ？」

倉石は煙草を取り出した。

「煙草なんて、吸っていたっけ？」

「ここにいる時は吸わなかったけど、戦地で大尉に勧められてね。貰って吸い始めた」

倉石は煙を大きく吸い込み、そして吐き出す。

「俺は明日、この国を出るよ」

寂しげに、だが、嬉しそうにして倉石は満ち足りた声を発した。

「海外へ？ 留学か？ 仕事か？」

武藤の質問をにこやかな笑みで包み、倉石は煙草の灰を落とし言った。

「俺は、戦地に帰るんだ」

任期が終われば、国に戻って大学に入る。そして働いて、結婚して、子供ができて、年老いてやがては死ぬ。

全ては血の雨に押し流された脆い夢である。映画や本で見ていた戦場と、倉石の目の前で繰り広げられたそれは、まるで違った。己の体も敵の銃弾や殺意にさらされることはすぐに分かったが、それは頭の中の世界であって、いざそれが生々しく目の前に繰り広げられてしまうと、体

が竦んで動けなくなる。

それであるのに、倉石は運動能力が人より僅かに秀でていたため、より危険な前線へと頻繁に投入された。

不平を言ったところで上官に黙殺されたし、だからと言って不貞腐れていれば死ぬのである。必死であった。

——生きて帰って大学に入る。

その一念で倉石は戦場を駆け抜けた。死ぬ、と思った瞬間に本当に死んでしまいそうで、そのことは忘れることにした。ただただ走る。銃を持って走り、時折身を隠せる場所に伏せた。上官の命令に銃を構え、がむしゃらに撃った。共に駆け出した戦友が、突然物言わぬ肉の塊になることなど日常であったし、顔を押し付けていたすぐ横に、炸裂した砲弾の鋭利な金属が突き刺さっていたこともある。あわやというところでそれは倉石の頭蓋を切裂きはしなかったが、全身にそれを浴び、緩やかに死へと誘われた戦友もいた。

即死が最も幸福であった。

喉を破られ、震える手を差し伸べたまま逝った者もいる。己の死を認識しながらも、生きたいと、助けてくれと涙を流し彼らは死んでいった。

倉石は闇に立ち尽くすしかない。

砲声が聞こえる。銃弾が耳を掠めていく音が聞こえる。友の叫び声も、敵の死に絶えていく断末魔の悲鳴もいまだ耳の奥に残っている。

倉石の視線が宙を泳いだ。武藤はふと倉石の手元を見る。生々しい傷跡が大きく走る手の甲がそこにはあった。

「お前、これは戦場で？」

思わず叫んで立ち上がり、武藤は身を引く。そこでやっと倉石の目が現実には舞い戻った。彼は、どうということもなく己の手を眺め、

「ああ、これは先輩が」

「先輩が？」

「はは、大丈夫。いじめられたんじゃない」

心配するかと、倉石はまた乾いた笑みを浮かべた。

倉石は生き残った。生きてようやく交代の時期を迎えることができたのである。それは唐突に訪れて、事務的に倉石は帰りのヘリコプターに押し込められ、戦地からの姿のまま——腰に銃剣をぶら下げ、肩に銃を担いだ状態で送り出されてきた駅のホームに降り立ったのである。

懐かしい線路と車両の軋む音、明るく自分を照らす電灯、ふと見えた自動販売機やスーツ姿の人々の姿に、倉石はようやく生還を実感した。

だが、共に出てきた仲間の半数を戦地に置いてきている。遺体を持ちかえることはできず残した友もいたし、補充されてきて仲良くなった後輩たちもまだ戦地だ。その彼らの懐かしい顔どもが次々と脳裏に浮かび、それが倉石の姿をどこか小さく見せた。

眩しく光る青空の下、それでも一歩踏み出した彼に、マイクを持った男が滑るようにして駆け寄ってきた。

「お疲れ様です」

彼は取り繕った安い使命感のある声で言い、倉石にマイクを向けた。

「戦地はどのような状況でしたか」

「.....どのようって」

と、思ったが声にならない。戸惑う倉石に男は続けた。

「敵は殺しましたか？ その瞬間どのような思いでしたか？ 殺されそうになったことはありますか？」

矢継ぎ早の、好奇心に駆りたてられただけの、それでいて妙に正義感溢れる声を、倉石はまじまじと見た。

彼らが期待する言葉と経験とを倉石は持っていた。

倉石は人を――敵を殺した。初めて殺した人間は女であった。刺し殺した、今、腰にぶら下げている銃剣で殺したのである。

刺殺した直後、激しい眩暈と吐き気に襲われ、地面に膝をつき嘔吐した。

血の匂いが己の手から立ちのぼってくるような錯覚を覚え、倉石は慌てて両手を見る。

土と血で汚れた自分の体から、血の匂いが立ち込めている。

視界が歪む。吐き気と痛みとが倉石を襲い、足を竦ませた。

遠くに黒煙が見える。地鳴りのような砲声が轟いて、真っ赤な夕闇が血に見えた。

「倉石」

背後から聞こえた声に、倉石の背筋に緊張が走った。目の前にいるリポーターは何事かを喚き、憐みの目でこちらを見ているが、倉石には声を出すことが禁じられているかのように、掠れた息を吐き出すしかできない。

「倉石、行くの？」

その声は単調に紡がれた。彼を引き止めるでもなく、責めるでもない言葉は、つい三日前に聞いたばかりだ。

「安原伍長！」

声の主の名を叫び、ようやく振り向いたそこには、走り去っていく車両があるだけであった。

結局、記者には何も言い出せず、倉石は上官の怒鳴り声に便乗してその場を逃げ出したのである。

安原。気がつくと傍にいるといった風な、先輩格の兵士である。彼は徴兵された兵士ではなく、これを職業として生きていた男だった。

誰にも興味を示さない男は、誰より人を殺すことに長けていた。顔色一つ変えずに敵を殺し生き残る彼は、倉石が去るために乗り込んだトラックを見上げ、どんな心も込めずに言ったのだ。

「――元気で」

黒煙を背景にしたその光景が、激しく瞼の裏で点滅し、倉石はきつく目を閉じる。

「.....痛みがあれば、安心する」

それも安原が言ったことだ。撃たれた倉石に笑って投げた言葉である。

汗が冷たく倉石の背を走り落ち、握りつぶされるように頭が締め付けられる。

「――痛いと言っていると考える、これがあれば怖いことはない、怖いことがなければ生きてい

ける、怖いと思ったら死ぬんだ……」

呪文を唱えるかのようにして呟く倉石に、武藤は目を見張った。

「倉石？」

その名を呼ぶと、再び倉石は自分が立つ世界に舞い戻り、透明な笑みを浮かべた。

「あ……ごめん。何でもない。俺はそろそろ行かないと」

立ち上がる倉石に、武藤は動揺して叫ぶ。

「なんでお前、戦地に戻るんだよ！ もう戦争は終わったじゃないか！」

「……終わったんだっけ」

「そうだよ、俺らが行かなきゃならない戦場なんてもうないんだ！」

倉石は首を傾げ、

「知らないのか。まだ一部部隊が残っている。……そうか、マスコミはもう別のことで忙しいから」

「倉石！」

「なあ、武藤。もう少し頑張れば、きっと俺はお前と同じ場所にいたかもな」  
帰ったら大学に入る。そう思い続けて生き残った。

だが、夢は変わることはなかったが、倉石の心が変わってしまった。

倉石は大学に入ろうとして、帰還後すぐにネットの海を彷徨い、資料も取り寄せた。親は戦地の息子のために、願掛けでもするかのようにして金を貯めており、予備校にも通わせてくれると言った。

その母の、父の、穏やかで楽しげで、輝く笑顔が、倉石を責め始めたのは予備校を決めてからである。

若者で溢れ、賑わう予備校の教室がひどく息苦しい。彼らの声が耳鳴りのように倉石に張り付き、吐き気を誘い、ほどなく倉石は予備校を辞めた。だが親にそれを言うことができず、彼は予備校の時間帯に繁華街を徘徊した。

まるで己の居場所など掻き消えてしまったかのようにであった。

自分が参加した戦争の賛否、そもそも徴兵制度の正しさ、帰った兵士の心のケアなど、テレビでは大騒ぎであった。

街を歩けば、見知らぬ他人が声をかけてくる。おそらく倉石から発せられる戦場の匂いと、敵を探るように動かす視線で分かるのであろう。彼らはいつも同じ問いを倉石に浴びせた。

ある時倉石は、そんな一人に罵声を浴びせたことがある。

——俺は、人を殺した。

——たくさん殺した。殺してしまった。それがなんだっていうんだ、行けというから行ったんだ。

その時向けられた蔑む視線が、ますます倉石を追いつめていく。

それなのに、彼はあの場所へ戻るしかなかった。

夜の闇が静寂を呼び、目の前から現実をかき消すと、戦友たちの声が倉石の足元から這い上がってくるのだ。殺した者達の腕を踏み、叫んで飛び起きることもあった。

この国の静けさが、倉石を受け入れなかった。



だから倉石はここに来た。帰還した時のままであった背囊を家から持ち出して、それからもう帰らずに、ずっとこの場所で懐かしい駐屯地と砲声と上官の声とを身に纏わせている。そんな倉石に気がついた、駐屯地にいる見知った上官が彼に手を差し伸べたのであった。

仲間達と共にいた生活、それほど遠くはなく、そして長くもない経験が彼に爪を立てて剥がれてくれず、倉石もまたその幻影にしがみついている。

そして彼は決めた。

このままでは歩けない。歩ける場所へ、倉石は行かねばならなかった。

「倉石」

「大丈夫、別に人殺しが好きになったんじゃないんだ。……ただ」

倉石は足元の背囊を力強く持ちあげた。

「ここでどうやって生活していたか、分からなくなっただけなんだ」

彼は静かに立ち去った。武藤はその場に縛り付けられたかのように立ち尽くしている。

彼らは二度と会うことはなかった。

ほどなくして武藤が、何気なくつけたテレビのモニターの中に映し出された銃を持つ集団のうちに、倉石らしき輪郭を認めたのが、最後である。